研究余滴

小さな語誌 ―「雑熱」について―

位藤　邦生

岩佐美代子さんの近著『宮廷に生きる　天皇と女房と』には、諸方で行われた六つの講演が収められていて、それぞれまことに興味深い。[注4] その中の一つ「『花園院宸記』―天皇の日常と思索―」に、次のような箇所がある。

このように心神違例という記事が、御在位中―退位なさってからも―随分ちょくちょく出てまいります。全宸記を通じて、そう大きな病気ではなくて、歯が痛いとか、雑熱―何となく熱っぽいとか、上気―のぼせるとか、そういう記事がしょっちゅうありまして、感受性が強く過敏な体質なり気質なりというものがうかがわれます。

岩佐さんがここに言われる「雑熱」は、次の記事の如き用例ではあるまいか。

九日己巳　晴、今日依朕雑熱、不可沐浴之由全成申之間、自今日止之（正和二年四月九日）[注5]

※

一九九五年秋刊行の雑誌「文学」（第六巻・第四号）は、「〈特集〉＝定家『明月記』を読む」で、その中の「『明月記』（建仁二年七月）を読む」（明月記研究会編）に、次のような記述がある。

〔本文〕昨今聊御雑熱、被付御薬云々、（建仁二年七月二十五日）

〔訓読〕昨今いささか御雑熱、御薬を付けらると云々。

〔大意〕日ごろ院はちょっとした熱が続いており、御薬を召されているということだ。

※

右にあげた二つの例で、「雑熱」は「何となく熱っぽい」とか「ちょっとした熱」と解されているが、『花園院宸記』や『明月記』など中世の真名日記に見られる「雑熱」は、そういう意味の語ではなさそうである。現代から見てその字面が特に難しそうでなく、現代語からの類推が容易に思われる語の場合、私などもつい、辞書を引くのを怠ってしまいがちになるのだが、案外それが落とし穴になる場合がある。

※

右に摘記した『花園院宸記』の記事に関連する記事が、翌々日にある。

十一日辛未　晴、英成朝臣、全成朝臣朕腫物針立、血多出、後痛頗止（『花園院宸記』）

また『明月記』には、以下の如き例が見られる。

〔本文〕伺時成朝臣、密々述心中区々思、背腰之間有腫物、可付薬之由、申内府以下（建仁二年七月二十八日）

〔訓読〕時成朝臣を伺ひ、密々に心中区々の思ひを述ぶ。背腰の間

に腫物あり。薬を付くべきの由、内府以下に申し、

〔大意〕医師の時成を訪ね、内々にあれこれと悩みを訴えた。背と腰の間にできものがあり、薬を付けて治療しなければならない、とのことを内大臣通親らに申して、

二つの文中の英成、全成、時成はみな和気氏の人間で、宮廷出入りの医師である。こちらの例では、研究会のかたがたも「付薬」を「薬を付けて」と解しておられる。

※

すでに明らかなように、「雑熱」は腫物、できものの謂で、後鳥羽院の「雑熱」に御薬を付けるというのは、膏薬を付ける意であって、薬を服用するのとは異なっていた。『明月記』の別の事例でも、たとえば「十日　天晴　艾跡付腫薬」（建仁三年二月）[5]とあって、「付」の文字は外用薬の塗布の意に使用している。『日葡辞書』に次の記載がある。

「Zōnet. ザゥネッ（雑熱）　すなわち，Faremono.（腫物）膿瘍，または，腫物．」（『邦訳　日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳）

※

『広辞苑』には登録されていないが、『日本国語大辞典』は「中世、外科疾患の一種。できもの。はれもの。」と説明して、『看聞御記』『言継卿記』『日葡辞書』の用例を載せている。また『角川古語大辞典』も「はれもの。腫瘍。『日ポ』に「Zōnet　はれもの」とある。「雑熱ザウネツ（腫物）」〔黒本本節用〕」と説明した上で、『看聞日記』『言国卿記』から用例を引いている。

※

私は、こどもの頃、生まれ育った広島県の備後地方で「ドーネツ」という言葉を使っていたのを思い出した。ドーネツは、その地方では、腫物・できものの中でも特に、背中や殊に臀部にできるものを言った。戦後は栄養状態が悪かったからか、ドーネツを患うこどもが多かった。そんな時には膿を吸い出すための軟膏や薬草を用いた。試みに『広島県　方言辞典』（村岡浅夫編）[6]を引いてみると、【はれもの・腫物】の項目中に「どうねつ　芸北東から備北備央。」とあり、「〈広島〉全県できもの類、安芸北はその西にかたね、南にでんぱち。備後はその北と中央にどうねつ。県南と島にできもん、でもん類。」と、詳しい説明がある。さらに、「どうねつは胴熱と宛てるべきか、恐らく、悪性腫瘍を含めて、嫌な予感のする熱っぽさから、「～がついた」「～ができた」というようになったと思われる。」と記述がある。

※

備後地方で行われる「ドーネツ」は、村岡氏の言う「胴熱」ではなく、中世語「雑熱」が音転訛を起こしたものであろうと思う。ザ行とダ行の変換はほかにいくらもあった。私が育った時分、老人は「バンゲニャー　ヨッテミマサー」などと言った。「晩方にはお寄りしてみますよ」の意である。「バンゲ」はおそらく中世語の「晩

景」である。全国で広く行われている「オードナ」「オードーナ」もよく用いた。近年刊行された藤原与一先生の『日本語方言辞書』に、主に大胆な、乱暴なの意味を表す「オードナ」について、次のような記述が見られる。

○「横道な」からのものであろうか。民間漢語としては、かなりむずかしい言いかたがとられたものである。それが普及したところには、民間の漢語ごのみのつよさがうかがわれる。（そうした漢語ごのみの中には、なんとなく音相にほれこむというところもあったか。）[6]（以下略）

真名日記に頻出する「雑熱」の意味がわかり、しかも自分が幼いころに使っていた「ドーネツ」の出自も判明して、私は少々嬉しくなり、蕪雑な報告をした次第である。

注①『宮廷に生きる　天皇と女房と』（岩佐美代子・平成九年六月・笠間書院）

②『花園院宸記』本文は史料大成（臨川書院）による。

③『明月記』本文は冷泉時雨亭文庫定家自筆本。国書刊行会本は「腫薬」が「膏薬」となっている。

④『広島県方言辞典』（村岡浅夫編・一九八一年一月・南海堂）

⑤『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』（藤原与一編・一九九六年七月・東京堂出版）

――いとう・くにお、広島大学文学部教授――